



桔尾華
上

^ 5
2095
1



利5
2.095
2

多
亦
非

芭蕉翁続馬紀

藤野深氏遺愛記

明治35年四月廿四日

藤野深氏寄贈

河田堂

と水やうなるをわがしら重くおれと
酒りし心し泉石冷くそ向納涼の
地を子に湿氣をきげしおを福と
あつた乾ちりけり新ちりけりひ色
深る腸をすむるうことわひくもあ
る如きのがれをむとせらる閉塞し
れくちをあつとくも僕ちなく立返す

芭蕉

今年孰中を妻なりと歌あへり抑
以翁孤獨貧窮より徳業ありと云ふ
まは此量なり二午條くの門を去るを
ひもつと合にあり因と縁との不可思
縁ゆありとと勘破りいひて天和と
年の久し深川のその居急火よりかたあを
激下ひよと管をうつよと煙のうらま
生のひりん是と玉の結のそとのねぶ物

つと多由如火宅の變を悟り無所
住の心を教りも其次の身其のまじく
甲斐の根中くししと女生のまじく
つと多由如とととととと更月下入
無我さらしん昔の徳く立歸りおし
くおしんくおしんく焼糸の舊州
片をたしめし心も心もあふる海
あもたしつふ乃芭蕉を植り雨中吟

芭蕉世分りし盗りて、
傳ふるに堪困の友志げく、
ちのつゝ芭蕉をよりあはしめ、
成せりの此圓曉る大巔和尚より、
易ありしを、
傳ふる或時翁の如卦の、
年月時日を古番み合せて、
多かる華とし、
是を

そこの為る風、
うもるは、
つ事なく、
しと、
潜カなるん、
るつ、
信と聖典の瑞を感じ、
こゝに

魚のあかりとねむかきも慰むる所
 乃くらぬ橋より舟を揺り揺りむの
 空澄と上舟の淡きうや眼前の奇
 景も推してくをみくせちうあひも
 ちりりくはせとさるる聊悲しく
 る早うとて貞享初のこの秋知利
 ちりりくはせとさるる聊悲しく
 世のこころはあはれしくせらるるよ

赤いつばきとてくらのわきから茶の
 羽織ひのき笠よあはれしくせらるる
 あはれしく風狂しくこころあはれしく
 魚多く鄙のちみきりくをくく名越
 と句を悲あはれしくはあはれしく隠せ
 うあはれしく竹舟の河よりかや風乃
 吟りく徳作しくこころの所と作
 あはれしく近在隣郷より馬をよせ

古尾

亦りちふるもせんは心なみも
思ふ一日も如くを心氣しつ
衰城と病屋のこゝ田みちりて
とらるゝとん其あやうと津路所
しつたり深く幻住菴 後菴年記 義仲寺
おく所至る処の風景を心の物あり
遊へるも年ちり元来混本寺佛頂和尚
子嗣法といひたり 禪入は修行といひ

一氣鉄鑄生ナスしよぼんさうも老力
くつぼんさうも毎のこゝも姿ま
も貞然と山家集の骨髓をばめ
あくるもやばねをこゝの杜子美と
むろもやと貧乏人の厚く喫茶の舎
盟と旅とらと宗鑑の酒あも教乃い
うしと成て自由躰放狂性世拳
口しつとせしも現力と凡篤實のち

風雅の妙もくく白い巾着もくく大極く
 流連雪々くくひろくく活る活るの如く
 流連島の如くくの林をくくくくくく
 子ゆくくく因由多る路くく兼好くくく
 西くく高野くく寂蓮銭袋の縁ハ宗祇
 宗長白川くく色載の多る店くくくく
 なるくく色蕉翁あつてくくくく
 せんくくくくくくくくくくくく

そのものもくくく 奥のあきたもくく
記ありは十餘年

うち杖と笠とくくくくくくくく
 まる所もくくくくく我胸の中をくく祖
 神のさかりくくくくくくくくく
 片くく旅の心や巻火焼是れ慈法和
 尚のくくく世よまのくく旅懐くくく
 中あのみもゆれをくくくくくくく
 あくくく思ふ合せくくくく遊子くく

書

下

生をばかしくしつゝむすむすはるし生涯
 をうらん西にむすむつる深川のなを
 又立出るきつぎ葎か箒教の老きわ
 くも返るこころをなほしこゝれきか
 かこしくおほくおほくおほくおほく
 伊賀のちんちんをうらむこころを
 ちんちんおほくおほくおほくおほく
 おほくおほくおほくおほくおほく
 おほくおほくおほくおほくおほく

へんちんおほくおほくおほくおほく
 おほくおほくおほくおほくおほく
 九月廿七日膳所の曲翠子よりおほく
 らせしおほくおほくおほくおほく
 の昏くおほくおほくおほくおほく
 おほくおほくおほくおほくおほく
 菌の塊ツカエ積カエことおほくおほくおほく
 けあおほくおほくおほくおほくおほく

七月
七月晦の夜ふらふ床よりのみせ泄痢度
志げくも物いふ力もななく手足氷ぢぢ
あつたはささくはつたあつたの中よめ去東
京より弛くるも一膳所より心裏のち保
たり赤節の別丈州平田の李由つよの流し
よあ各推後とたつてくる新衣もはなぬ
なゆるるもつらつらと心神の散乱をうるも
とけを不詳をうるもつらつと進くも招

の身は打くの相はたつてつらつらとむ、壁を
登りてゝ命運をける色は年々入ける
みや心弱おのけあめつらつらとつらつら
旅を病へるもつらつら枯骨をうけしる
あつたはつたはつたはつたはつたはつたはつた
あつたはつたはつたはつたはつたはつたはつた
よみ死んがのちを切お思ひくも悔ひ
し八日の夜めつらつら各うつらつらつらつら

賀會祈禱の句

落つる雪のふりしるふりしる非集り木節
 風の元元あまききかき露のあまきき去来
 足りぬる竹の林やみそこい惟然
 初雪のあまききあまきき佐古の宮正秀
 非のるるおと力や去のらせ之道
 非よししるふりしるふりしる非集り木節
 記さるる屯も崎しよ湯守が文考
 あまききあまききあまききあまきき
 吞舟

峠と原野のふたりを流す川は
 日あけしと見ゆ流るる花の菊し列

是とし生并の笑顔とく木節り葉を北と
 舟を恥めしと坐卧のしりけと花もの
 吞舟と舎羅こころは道り花りして
 舟と切子心しるふりしるふりしる
 舟と切子心しるふりしるふりしる

ことめしやもいふも縁よりきこ師平
 つよあつしついで悦みあつよんついにあつに
 ちよしけよあつしついで悦みあつよんついにあつに
 名うそしついで麻の衣の垢つよんついにあつに
 こしよあつしついで悦みあつよんついにあつに
 りねしついで錦繍のきこよんついにあつに
 りねしついで錦繍のきこよんついにあつに
 十日いよんついで悦みあつよんついにあつに
 十日いよんついで悦みあつよんついにあつに

府波の輪とらあつしついで悦みあつよんついにあつに
 しついで悦みあつよんついにあつに
 りねしついで錦繍のきこよんついにあつに
 りねしついで錦繍のきこよんついにあつに
 りねしついで錦繍のきこよんついにあつに
 りねしついで錦繍のきこよんついにあつに
 りねしついで錦繍のきこよんついにあつに
 りねしついで錦繍のきこよんついにあつに
 りねしついで錦繍のきこよんついにあつに
 りねしついで錦繍のきこよんついにあつに
 りねしついで錦繍のきこよんついにあつに
 りねしついで錦繍のきこよんついにあつに

情もよとくしけりけし病床よりうらみの
いんごもあはく懐^{フシヒ}ちのへかたのよと色う何と
かしくしりそ年らの深志の通し
住吉の神の川とあはく物とあはく
のうらもあはくしりけりあはく
思ひのうらもあはくしりけりあはく
うらもあはくしりけりあはく
うらもあはくしりけりあはく

おほくゆよ退りて毒味の心をあはく
膝ちゆりて病顔をみるこころあはく
あはくしりけりあはくしりけりあはく

吹井より病を招く人何あはく
とれおほくしりけりあはく
おほくしりけりあはくしりけりあはく
木曾殿と塚をあはくしりけりあはく
あはくしりけりあはくしりけりあはく

枯尾

廿

は月の光に照るるものもさうに常よと云
せし向ふものもさうさあ表に思へたらしくは
此後のほのほなうと云はれ侍りあまはし
ふよ葉をさうさうさうさあかのものも寝を
てうて原中へ

くうくうの葉の下乃 寒と云は 大州
病中のちまうりさうさあ 去来
川流さうさうさあ 笑い声 推考
志うさうさあ 次のもく出る 寒と云は 去来

おひんあおあおと云はし 正秀
風さうさあ 菜飯のほのほの 本節
皆さうさあ 寒くさうさあ しの

十二日の申此刻くうくうと死部と云はし
睦さうさあ 物打りけあひさうさあ
も 櫃みさうさあ 人の用さうさあ
らく川舟さうさあ のせ去来し 別大州と云考
惟然正秀のち節 吞舟の真さうさあ 次うさあ

予よゆゑ十人管ゆる事袖寒よ旅の
 ことちききむしむしをばつたつたのよ
 前縁をうらむしはは縁縁をらむらむか
 事いふ日ばのあふりいふひらひら
 教をのびみよしは淵の光をくしあひ
 はらむし思ひ志のくくをわく慕ひは
 昔河をらふらむらむらむ東南西北の招
 うたふつもの柄を定ちるゆゆのさや

真松島越の白山をくくくく
 をあひしつて驚くはいつの歌あはは
 了らむらむらむらむらむらむらむらむ
 ともさく此はよあはむらむらむらむらむ
 ともさくはらむらむらむらむらむらむ
 けくし一むらむ義仲寺ありわしと葬
 礼弟信を及く一京大坂古津船宿の
 運え振ふ哲者とともはらむの悟を慕

魚のこゝろをばらばらにせしめたる
百餘人に澤衣の如智月とし列の毒
ついでに著せしめしん則長仲寺の
直懸よりかきかちらふるにいおのが
引入ら所のかゝのよしく木号塚の右
おのゝこゝろに土いおのゝこゝろあり
をる柳もあつての墓れらきりまは
とこのまゝに印塔をありひあゝ垣を

志先み秋のこゝろを極く名のこゝろ
活常の風景をこのちる癖ちりくを
所らあつて山田上あつていそ所も
ちあふのせ傳出る舟も観念の記を
のこゝ樵の麻田家の雁遺骨をゆ
上の月みこゝろにさうりちあつて翁
あつて七月り程こゝろにいこゝろ
追善の真なり幸にあつていこゝろ

古屋

くみあけお色合感て愚う千一紙
享の紙を残り作るに頼もけき
のつこ我翁をそのまんまは是を
回向乃多うと云ふ

於栗津義仲寺牌位下 晋子書

元禄七年十月十八日 於義仲寺

追善之誦讚

晋子

あふりしを笠に隠すや松を毛
温石はちうし皆市に成る
は軒のわらうとくむは山を
てそとある土の縁を多て振る
つみ控し市の名も此も紙
はつててりね夕を以て紙
森の名をわのちうし月の新
之道

巻

五

世にけの茶のゆ鶴休し 去来
あつ芳田中お母をよむるひ 曲翠
旅く 旅く 行はるる 正奔
膝あふ子よし 丸く眉の物思ひ 卧高
はのらすうを想く の心 泥足
こつはふと舟の豆腐をせ 活まつ 列
本戸をさく 色 旅る あやけを 芝柏
著るるに 葛藤よ 句よ 天氣 合 昌房
車の休むは ぼく たくの 探芝

川の横に 流るる 川 胡故
真く 下へ 居あはする 牝玄
菴のまの 室い ちの 遊 雨 游刀
あすく せり お休乃 夢 蘇葉
世のあつ 集の ちの 惜さる 智月
多羅の 芳立ととと 吞舟
けをを けく みは 瓶茶 信 土芳
井へ 出へる 刀 荷 作る 卓袋
四つと お 髪を 垂る 脚あつ 美椿

昔よちる娘をねたのりて 野童
一衣のそまつい花を痛せり 素聲
糸のあきさく 珠の酒 万里
河川の思のかけし 吹たれり 識々
藪のあきさく 雀の丸 這萃
塩賣のつらつらあき 世筒 許六
力のぬりさく けちあし 細 田鳧
秋もけ 雉のさそそ 荒雀
くちさく せまき 楚江

小屏風の内より 色紙を亂し 野明
空のくちさく 花を痛せり 風園
福んじり 草鞋をけさく 木枝
かへ 堂みして 泣きさく 音子
ひらけし 侍氣み かく 角上
あきさく 雪さく 之道
あきさく 花の 小社目利 云来
挽りさく 花の 土芽
春のさく 花の 芝柏

ぬらんをききく せはきお 卧高
才子みよし 持くの子をまのぶる 尚白
月こし 町の井乃 垢離 昌房
秋のあ 蓮あ くるくも 舟野
世らの 新志まりをたぐ 犬艸
花のそと ちと ちと ちと 惟然
煮の 粥くら くら くら 美椿
小侍あつ くら くら くら 正秀
流澄く 出る 川へ 石 田島

日みちりく 葉の 虫限 ちく 朴吹
窓の 猫あ くら くら 角上
里と 八や くら くら 遠よ 家の 寺 泥足
つ くら くら くら 刻む 尚白
七つ くら くら くら 舟あ 形 卓袋
二季 くら くら くら 圃く の 掛 芝柏
内み くら くら くら くら 採芝
う くら くら くら くら 萱 游刀
け 牛を と あ くら くら 月 楚江

おろの地の元くあつて名を付 魚光

社は五命り十命り立なりと云 音子

祈りくともく代支話 教 風圃

お打溢る水上物を引つけく 支考

乳母と隣り送る啼児 正秀

獅子舞の拍子あけあがる昼下り 丈艸

雨氣乃をく尾かくし 昌房

在所く習俗の昔法をなす 即高

行所出りぬ 畠新 田 之道

とる所のは合よりよき昏の元 寺来

木像よりく傍子とゆるく 泥足

とまきくは子あつて斗句くせし 尚白

なまのともくかふる名 卓袋

漣ア我そのうくくおの天 角上

燈よむくくも志のよ聖霊 牝玄

かろくくせ花んるくく負け珠 土芳

名
村よりあつて伊勢講の種 芝相
暇みあつて小舞のあき 加減 這萃

軍ごふかしき祖父がよれ物 卧高
 淵を徹し陸壇の上をさへるこ 晉子
 新日めしふく念珠押もむ 正秀
 美人の道はづらん巨著寒し 文考
 ことろけく替々大小の額 魚光
 味寄つていゆゆ力をわくせや 楚江
 かみ龍年の何り可笑下 游刀
 ちりくちりゆゆゆさりばり 風國
 新赤うゆるさるる酒の碎 之道

白鳥の陰を葛をよみ梅をけ 採芝
 之河あかりハ天下一 去来
 飯をぬく内気もゆるるの丹 尚白
 叩者より積をみくもくか秋 回危
 うら寒ふ塙格子の窓ゆき 芝相
 文庫をあらけに指山伏 土芳
 信をもあてて虫目の目のもさ 惟徳
 海くも色ふ身庫川のあり 夫艸
 寮ありある外より鎖をけけせ 牝玄

思くく々情の奥に戒名と考
青天のちろくくむのうらむく 去来
巢にけしきくく千里の 正秀

七回十人満を真行大津膳所
京嗟哉括津伊賀之連衆也各
感愁眉而不求巧言也

傷七師終身作句 初七日迄

志せは色なきも十返の泪ふ 京玄来
啼うちの相氣をいませ 漢衛 傷李由
さびしき嵐も寒おととちり 大津木常
つるやりの宗紙も寸白おのま 日し引
いあまも泪をいせ 塚の奈 膳本昌房
霞の墓をゆるくやあまぬき 僧文州
了んぬの勢もいそふとん 湊む 吉根許志
用いそみきり 徳の舟のりん 同波村

墓中より十子あふせのくねり ぢ探芝

花席み満ちあもむねの糸 大津楚江

ぬくもりの着の考の鳥籠 吾の糸 聖田成夷

木弓掃やあ染る月影 塚の上 大つ織

日影にほ 塚のくねりやあもむね 日あ玉

月雪よせよ体升や 笈の脚 傍千那

志げ縮子紙子元あふ 脚の影 大つ尚白

了を翁の語りありけり 奥羽塞をうつりて
んしむりの呈書をもつりてあもむねの糸
こりてあもむねの糸をうつりてあもむねの糸
まはりのあもむねの糸をうつりてあもむねの糸

まはりのあもむねの糸 京徹士

とせぬあもむねの糸 傍角上

浩浩の空にけりてあもむねの糸 京野童

一あもむねの糸をうつりてあもむねの糸 日風園

あもむねの糸をうつりてあもむねの糸 紅久幸芳

悲しきもあもむねの糸をうつりてあもむねの糸 日阜袋

我もあもむねの糸をうつりてあもむねの糸 大坂之石

石もあもむねの糸をうつりてあもむねの糸 日芝拍

藤のあもむねの糸をうつりてあもむねの糸 傍支考

八月廿四日比の敷方の新歌

京春沈

十六日晉子を幻住庵平とありて
其のくくを新世といふ権のゆきを
いますこく平付をあらりて

あらしや何を力あつて

曲翠

綴れく木を色つて

正秀

うりくさいさすも

卧高

移ちて升るおの岩と

泥足

見送りし房の姿や

霊椿

すむらしたはぬ

晉子

丸つてん候ゆる

燒峨神

線まの綴り

月荒雀

神々の千も

大坂春舟

冬芭蕉衣の

ぢく魚光

立うの神

日回鳥

悔まぬ

日游刀

素ほく

日朴吹

木多

太木枝

らぬ

ぢく這華

はらばのあつさをけつゝ土の窓 大は土竜
ちりう際ハもろふや松のぬきも ぢ遊を
ひくしんをひくしんえとる縁の糸 日伴九
流しけして涙みあつたはるゑ 只や如

二七日廟参之悼句所と文通

香くらわさく徳の光也かみ山 念ふ
小枝葉やあつた白ひのあつた 尺草
あつた目也所よあつたのちもあつた 大坂如柿
くらわさく悲しきうさく松ノ木 ぢ遊

間あつたあつたあつたあつた 日吾我
松のあつたあつたの形やいのち 日松泉
びくしんえとる糸もあつた九日市 日朔巫
菊極はえ記り 馳走り 豊田裕睦
朝日くけてあつたあつたの 日重氏
あつたあつた指あつたあつた 女素聲
あつたあつたあつたあつたあつた 女方里
あつたあつたあつたあつたあつた 葉の惟然
あつたあつたあつたあつたあつた 女可南

ぬの目 襟あけけら 廻ふ ぢ 徹房
 くらげけら 糸もゆら 女目ち 口 麻三
 木兔の目うも 庚のしんね 口 砂上
 カそく 墓まけら 糸あふ 口 蚕鳥
 糸柳りけら 糸あふ 糸あふ 向 震新
 桜あけけら 糸あふ 竹の糸 さ 來儿
 糸あふ 糸あふ 糸あふ 小 倉雨夕
 幻あふ 糸あふ 糸あふ さ 為有
 カあふ 糸あふ 糸あふ 糸 根木守

糸あふ 糸あふ 糸あふ 糸 知行
 糸あふ 糸あふ 糸あふ 糸 田小作
 糸あふ 糸あふ 糸あふ 糸 京甚木
 糸あふ 糸あふ 糸あふ 糸 京甚木

二七日伊賀連流追悼句

糸あふ 糸あふ 糸あふ 糸 いろ玄鹿
 糸あふ 糸あふ 糸あふ 糸 山岸車来
 糸あふ 糸あふ 糸あふ 糸 浅井元隆
 糸あふ 糸あふ 糸あふ 糸 山田雪芝

ちりみへら啼きまひゆくはひ鴨
 六五くく足跡たけりりあう月
 おろけ戸洞のあよまの兼
 中地ううあの子地を洞りま
 なりおれへあまこしりる古障子
 白くへい何をれらる菊島
 伴や只もさこれ女垂中地
 みる種のをあふん志くく歌うふ
 山茶むの歌ねく色うま世お

杉地肥力
 尾本喜蘇
 終甫
 多一終
 依治洞木
 西沢魚目
 明毛
 毛尻
 出岸陽和
 木也枝峯

借息つるあまもちりり丸印巾
 くら木男の果やあ糸の吹地り
 芭蕉く枝あく神のくまら
 赤衣の小志ぼくほむあま
 へしをを猿の仕あつあま
 茶あつあつあつあつあつあつ
 けしあつあつあつあつあつあつ
 菊あつあつあつあつあつあつ
 ちりみへら啼きまひゆくはひ鴨

大取
 万平
 猿雖
 小南風書
 桂田示峰
 井馬
 馬解
 演亦之
 中尾櫻市
 十重
 ちりみ
 けしあつ

松の葉よ新入つる男衆のふ 糸田作木

笠を返す時を待つ 井上 宗徳

そのまゝを返さずも 山崎 宗徳

すゝくつてきても 大保仙杖

新くこの葉も 松本水固

水たの遠よわねや 内神九郎

たのまゝくのは脚 栗津 ぐらうらうら

まのあまの活らる文字の村衛 いら半残

あまの茶の末を 西河百成

恨あまのささるや 浦の

ほろも 来川鳥栗

四七日をめぐりて 普音文通之句

猿の乃神の毛 伊世孫州

多のあまの 日国友

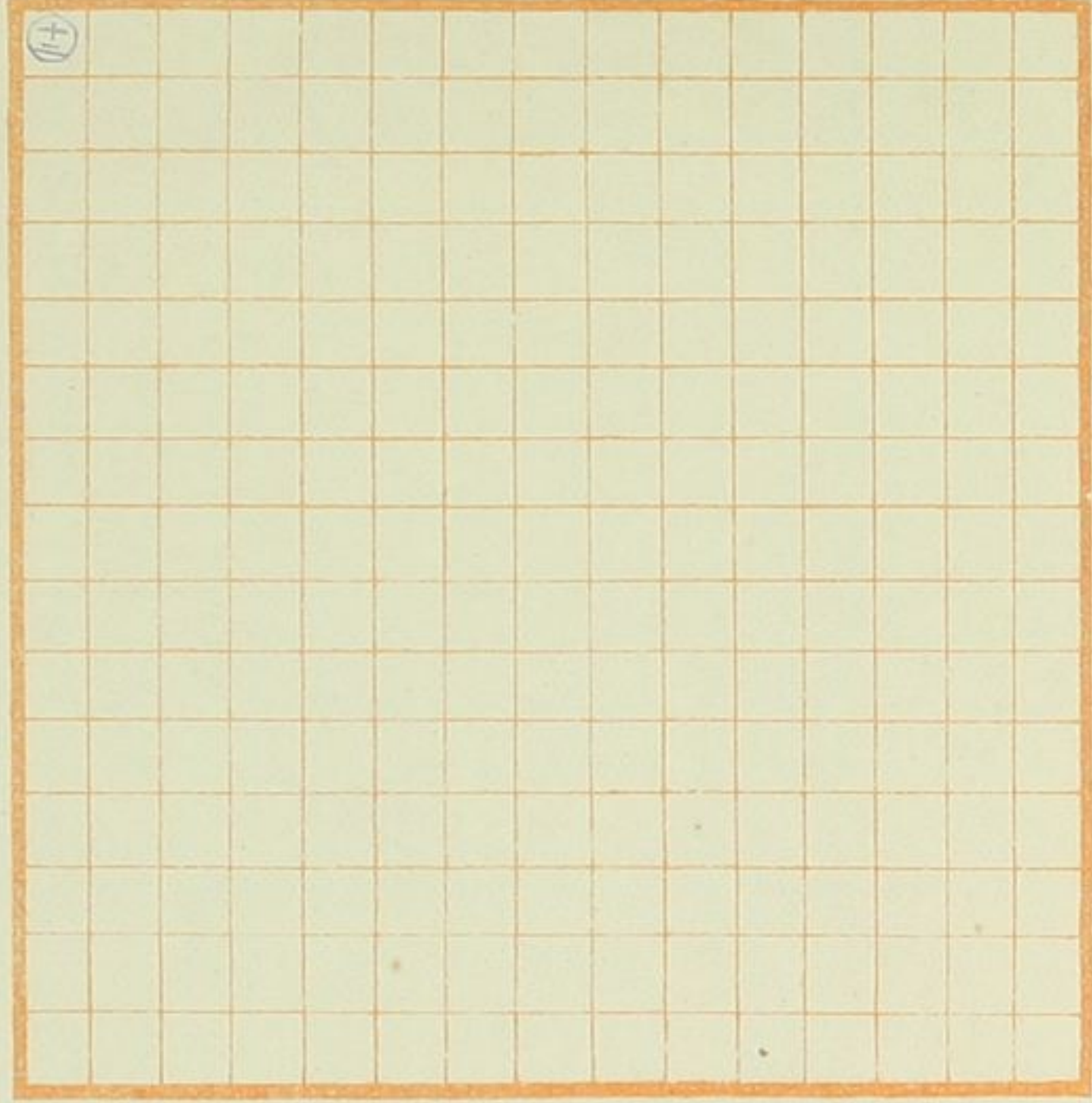
流してあまの 日定芽

信あまの 日宗比

みつは下 日斗從

玉一ねを世に 日芦本

4年 月



河合くさめ子悲しお義忠
 い七援不
 せうせいの笠そとんあれ笠 日庵牧
 平の成子水鏡のこみあり 尾洲高川
 梅川也一羽をなれくつあり 日素榮
 新のちりて光あり一と牡丹の 日九次
 白つらつらあふ糸まての塚の揃 光尊
 明く晴ありの日影也柳をぬ 大坂伽香
 袴飼えく川也も中る月か みの低耳
 文基くちあぬ影く古原市 伊予黄山

上終



持屋上

丁三巻

河合くさくさの悲しき歌水戸 いせ援不
 せらるゝの笠をえんあはれ笠 日産教
 平の成子水鏡のこゝろの 尾刈高川
 梅川也一羽をなれくもふる 日素策
 新のちりて光方よりと特舟の 日九次
 白つらゝのゆき紫まゝの塚の揃 光常
 明く晴あゝの日影也かゝる数 大坂伽香
 粉飼えく川也も中る月か みの低耳
 文基をくさるゝの 古原市 伊予黄山

上終



